

「初舞台」が語るもの

古来、初舞台を踏むのは6歳の6月6日と 言われて来た。現在のように満年齢ではないので、ほぼ満5歳になってからと思えば良い。

では、実際にその頃、「初舞台」を踏んだのかと言うと、そんな悠長な事では古典の芸能は継承されなかったであろう。東京書店刊『狂言辞典—事項編』によって五十四人の明治以後の狂言師の「初舞台」を調べてみた。近年の人々は、重要無形文化財に指定されている人に限った。なお、初舞台の年齢・曲目・役柄の不明の人もあったが、追跡調査は行わなかった。(敬称略—五十音順)

石原 昌(大蔵流 一八九四生)	一九〇二年『靱猿』の猿 八歳
和泉 保之(和泉流 一九三七生)	一九四一年『靱猿』の猿 四歳
井上菊次郎(和泉流共同社 一八八四生)	一八八八年 不明 五歳
井上新三郎(和泉流共同社 一八八七生)	一八九一年『靱猿』の猿 四歳
井上松次郎(和泉流共同社 一九一四生)	一九一九年『靱猿』の猿 五歳
井上礼之助(和泉流共同社 一九一五生)	一九二二年『首引』の鬼 七歳
王丸治三郎(大蔵流 一九〇六生)	一九二六年 不明 二〇歳
大蔵弥右衛門(大蔵流 一九一一生)	一九一七年『靱猿』の猿 五歳
大島 寛治(大蔵流 一九二三生)	一九三四年『枕物狂』の乙御前 一一歳
金浦 扇丈(和泉流 一八八七生)	一九一三年『舟船』の太郎冠者 二六歳
河村 丘造(和泉流共同社 一八九五生)	一九〇一年『癩痢』の太郎冠者 六歳
木村 正雄(大蔵流 一九二九生)	一九二三年『以呂波』の子 三歳
佐藤卯三郎(和泉流共同社 一八九二生)	一八九七年『口真似』の太郎冠者 五歳
佐藤 秀雄(和泉流共同社 一九一一生)	一九二四年『柿山伏』の山伏 一二歳
佐野 平六(和泉流 一八八九生)	一九〇八年『宗論』の茶屋 一九歳
茂山あきら(大蔵流 一九五二生)	一九五六年『以呂波』の子 四歳
茂山七五三(大蔵流 一八四七生)	一九五二年『以呂波』の子 五歳
茂山 千作(大蔵流 一九一九生 一二世)	一九二三年『以呂波』の子 四歳
茂山 千作(大蔵流 一八六四生 一〇世)	一八六八年『柿山伏』の山伏 四歳
茂山 千作(大蔵流 一八九六生 一一世)	一九〇二年『附子』の太郎冠者 六歳
茂山千之丞(大蔵流 一九二三生)	一九二六年『以呂波』の子 三歳
茂山忠三郎(大蔵流 一九二八生 四世)	一九三三年『業平餅』の子方 五歳
茂山忠三郎(大蔵流 一八九五生 三世)	一九〇〇年『靱猿』の猿 五歳
茂山千五郎(大蔵流 一九四五生 一三世)	一九四九年『以呂波』の子 四歳
善竹圭五郎(大蔵流 一九一八生)	一九二四年『靱猿』の猿 六歳
善竹玄三郎(大蔵流 一九一四生)	一九一九年『以呂波』の子 五歳
善竹幸四郎(大蔵流 一九一六生)	一九一三年『癩痢』の太郎冠者 六歳
善竹 十郎(大蔵流 一九四四生)	一九五一年『靱猿』の猿 七歳
善竹忠一郎(大蔵流 一九四〇生 二世)	一九四七年『靱猿』の猿 七歳

善竹 忠重(大蔵流 一九四七生)	一九五二年『癡痢』の太郎冠者 五歳
善行忠一郎(大蔵流 一九一〇生 一世)	一九一六年『癡痢』の太郎冠者 六歳
善竹 長徳(大蔵流 一九四七生)	一九五二年『靱猿』の猿 五歳
善竹弥五郎(大蔵流 一八八三生)	一八八八年『靱猿』の猿 五歳
殿村 与件(和泉流 一八九五生)	一九一四年『舟船』の主 一九歳
中島 登(大蔵流 一九二八生)	一九三八年『癡痢』の太郎冠者 一一歳
中西 治郎(山口鷺流 一八九三生)	一九二九年『文荷』の太郎冠者 三六歳
野間善左衛門(和泉流 一八五六生)	一八六〇年 不明 四歳
野村又三郎(和泉流 一九二一生 二世)	一九二五年『餅?』のシテ 四歳
野村又三郎(和泉流 一八六五生 一世)	一八七〇年『伊呂波』の子 五歳
野村 万作(和泉流 一九三一生)	一九三四年『靱猿』の猿 三歳
野村 万蔵(和泉流 一八九八生 六世)	一九〇三年『靱猿』の猿 五歳
野村 萬(和泉流 一九三〇生)	一九三四年『靱猿』の猿 四歳
野村万之介(和泉流 一九三九生)	一九四四年『鉢叩』の瓢の神 五歳
能村 祐丞(和泉流 一九一一生)	一九三一年『成上り』のシテ 一九歳
武藤 達三(大蔵流 一八九七生)	一九一一年 不明 一四歳
三宅惣三郎(和泉流 一八五二生)	一八六〇年『靱猿』の猿 八歳
三宅藤九郎(和泉流 一九〇一生)	一九〇五年『靱猿』の猿 四歳
山本東次郎(大蔵流 一八九八生 三世)	一九〇七年『田村』の間 九歳
山本東次郎(大蔵流 一八六四生 二世)	一八六八年『金津』の子方 四歳
山本東次郎(大蔵流 一九三七生 四世)	一九四二年『癡痢』の太郎冠者 五歳
山本 則直(大蔵流 一九三九生)	一九四四年『以呂波』の子 五歳
山本 則俊(大蔵流 一九四二生)	一九四七年『以呂波』の子 五歳
吉田 清二(大蔵流 一八九九生)	一九三二年『左近三郎』のシテ 三三歳
和田喜太郎(和泉流 一九〇七生)	一九一八年『牛盗人』の子方 一一歳

色々面白い事が分かるが、その中で「初 舞台」の狂言の曲目に注意を向けたい。曲目 中で数の多いものから列举すると、

『靱猿』の猿 十六

『以呂波』の子 十

『癡痢』の太郎冠者 六

が御三家で、後は『首引』眷属鬼・『枕物狂』の乙・『業平餅』の子方や、『舟船』の太郎冠者か主・『宗論』の亭主・『口真似』の太郎冠者・『牛盗人』の子方、凄いのは『附子』の太郎冠者・『田村』間・『柿山伏』の山伏・『左近三郎』のシテ・『餅』のシテ・『成上り』の太郎冠者・『金津』の子・『鉢叩き』の瓢の神などと言うのも一番ずつある。

この曲目と役柄から見ると、台詞よりも型から入って行く『靱猿』型と、型よりも台詞 から入って行く『以呂波』型(『癡痢』も含めて)とに分ける事が出来そうである。

『靱猿』型が和泉流に多く、『以呂波』型は大蔵流に多い。これは江戸型と上方型と考える事も出来る。そういえば、江戸型と上方型との芸能には顕著な差がある。

歌舞伎で見ると隈取りをし、大仰に手足・首・目玉を動かして演技する「荒事」が江戸型の代表だと考えると、四畳半の部屋で炬燵をはさんで台詞で聞かせる「和事」は上方型の代表とも一言える。

三河万歳から始まったとされる、太夫と才蔵の喋繰り漫才も、聞かせる事を主としている上方型だが、最近は動きで見せる江戸型の漫才が主流を占めている。

これらの芸能の先輩である狂言も、本来は『酢薑』や『舟船』のように、言葉の面白さを中心とした作品から、『附子』『棒縛』のように演技を中心とする作品に変化して来た物で、言葉の面白さから入ったと思われる。

大蔵流の古さが、狂言師の「初舞台」にも現れていて面白いと思う。

「2000年京都大学能と狂言の会パンフレット」及び「お豆腐通信第13号」を元に加筆・訂正